

第38号 2022.1.1発行
発行者：株式会社協進印刷
編集者：JO編集委員会

誰かの力になりたいと 思ったとき、その思いを つなげられるサービスに

株式会社 Stock Base

関 芳実さん・菊原美里さん



横浜市立大学国際総合科学部の現役大学生2人が設立した社会事業ベンチャー。賞味期限で廃棄される企業の災害備蓄品を、地域の食支援活動に活用するビジネスを展開中。「ちばぎん・はまぎん学生ビジコン2020」はまぎんアイデア賞、「第1回よこはまアイデアチャレンジ」で最優秀賞を受賞。
<https://www.stockbase.co.jp/>

江森…お二人は現役の大学生でありながら、昨年株式会社を設立して起業したということですが、どんなビジネスで起業したので

菊原…企業の災害備蓄品を廃棄せずに有効活用するための、寄付先のマッチング事業をしています。賞味期限間近になった非常食などの備蓄品を、子ども食堂やフードバンクなど食支援をしている団体とマッチングしています。食品の他にも余ってしまったボールペンやクリアファイルなどのノベルティも扱っています。

江森…どこでお金にするんですか。

菊原…企業さんとしても賞味期限切れの食品は廃棄せざるを得ないので、廃棄費用がかかります。同じ費用をかけるなら寄付のために使っていたらこうと、寄付先マッチングのための手数料と配送料を負担してい

ただいています。その手数料が私たちの収益になります。

江森…なるほど、それは社会的にも意義のある仕事ですね。在学中に起業するというのもすごいというか思い切ったなと感じますが、「起業プランニング論」という授業を受けたことがきっかけときました。

関…授業やその後出場したビジネスコンテストを通じて、企業が抱える災害備蓄品廃棄の問題や、地域での食支援の課題を知りました。ビジネスコンテストでは外部の方から高い評価をいただくことができてうれしかったのですが、同時にただのアイデアで終わってしまっているのかな、優勝して終わりじゃないよなと思うようになりました。これは負けず嫌いな私たちの性格もあると思いますが、まずはこのサービスを世に出して目の前の課題を解決したいという

思いで、起業というよりは事業化することを決めました。企業との取引になるので、こちらも企業として対等にできた方が良いかなと思ったので、会社を設立することにしました。

江森…会社を作るといよりはプロジェクト色が強いんですね。

菊原…もともとプロジェクトベースで進めていたことですし、それを継続する手段が起業だったということですね。そもそも自分の人生の中で起業なんて考えてもいなかったし、全然興味なかったですから（笑）。
江森…そうなの？お父さんの影響とかじゃないの？

菊原…全然ないです。普通に就活してみないと一緒に卒業してっていう未来しか考えてなかったです。

江森…最初からこの2人でやっていくと

決めていたのですか？

関…もともと5人のグループでやってたんですが、事業化にあたって引き続きやっていくかどうかをそれぞれが考えて、たまたま残ったのがこの2人だったんです。

江森…ひとりしか残らなかつたらどうでした？やめてた？

菊原…やめてたというより始まらなかったと思いますね（笑）

関…進まなかつたよね。2分の1倍速ぐらい？（笑）

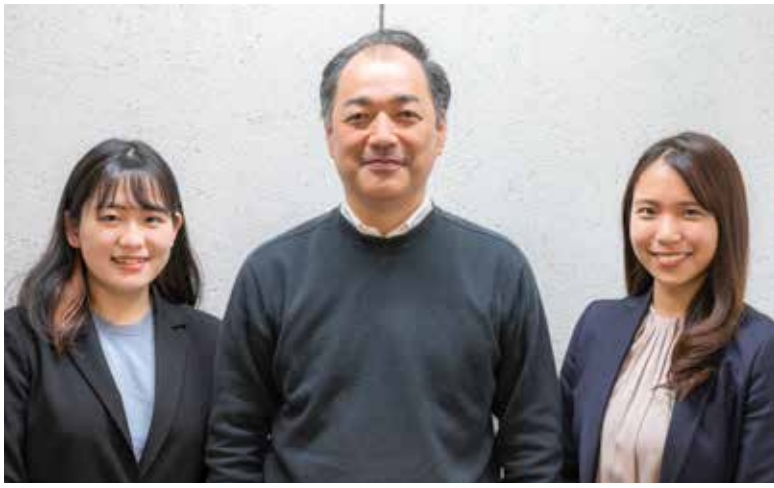
始めた当時は名刺の渡し方とか請求書の書き方とか、とにかく社会人としてのスキルが何ひとつなくて、教授に教えていただきましたけど、2人だったからなんとかあったところもあると思います。

江森…日本ではずっと前から起業家教育が

必要だということで政策的にもいろいろやっているわけですが、とてもうまくいっているとはいえない状況です。どうしたらいいと思いますか。

関：個人的には起業家教育よりは、課題の設定と解決策を自分で考えて発信できるような人がたくさん必要なんじゃないかと思えますね。私たちも会社を大きくするということよりも、この事業をいかに持続させるかということを大事にしているので、会社にこだわる必要あるのかなと思います。

菊原：これは起業してみてもわかったことですが、終身雇用制度の中で、どこかの企業に入れば一生安泰と思うことが衰退につながっているのではないかと思います。私た



ちはバブルを知りませんが、バブルの頃だったら学歴とか関係なく稼げる人は稼いでいたと思うのですが、今は溜め込む経済になっってしまったって、最初に就職した先でいくらの給料がもらえるかで生活の基準がきまってしまうので、そこを取りに行くために受験を乗り越えるんだということしか知らされていないというか…。他にも成功する方法があるんだということを知らないんだと思います。バブルみたいな時代になったらみんな起業すると思いますよ。

江森：では少しビジネスの話をしたいと思いますが、フードロスをなくそうというように、世界的にニーズが高いのは間違いないわけですが、一方でいわゆる「静脈ビジネス」というかいらぬものをどう再利用していくかという点では課題も多くて、お二人も日々課題を感じているのではないかと思います。いかがですか。

関：企業から見ると廃棄するはずだったものが有効活用されて良かったということになるのですが、もらった側からすると、自分は備蓄品をもらうほど貧困なんだということを再認識してしまうという課題があります。私たちのサービスはホームページ上に提供可能な物品を掲示して、欲しいものを選んでもらうシステムになっているので、いらぬものを押し付けるようなことにはならないのですが、それでも普通は「食べない」のが前提である備蓄食をもらうことに対する抵抗はあると思います。

江森：なるほど。一方で本当に支援が必要な子どもはなかなか子ども食堂に来ないという課題もよく聞きますが、そのあたりは

どうですか。

関：確かにそれは良く聞きますね。でもそれが子ども食堂であって、間口を広くして誰でも来られるようにすることが大事と考えて、みなさん運営されているようです。子ども食堂で飢えを凌ぐということではなくて、食事や何か渡せるものを介して相談してもらって、本音を言ってもらって、そういうコミュニケーションのツールなんです。ただ、渡すものが備蓄食だったりすると、気を悪くされてしまって逆効果になることもあるということですよ。

江森：企業側の課題はどうですか。

菊原：これは企業側というより入口における私たちの課題なのですが、いまのビジネスモデルでは、企業さんは物品を提供して、配送費も出して、さらに私たちにマッチング手数料を支払うことになるので、もともと捨てるはずだったものに対するコストとして納得感が薄いというのが、寄付が進まない理由のひとつになっていると感じています。

江森：確かにねえ、社員に配ったりすれば捨てる費用もかからないからね。

菊原：でも社員さんも、もらっても困るという意見も多いようなので、いらぬものを押し付けあっているぐらいなら、こういう方法もありますよということをもっと伝えていかなければならないと思っています。
江森：そもそも企業の防災意識というか、企業防災の課題として感じることはありますか。

菊原：多くの企業が非常食を備蓄しているのですが、ほとんど持っているだけというか、福利厚生のアピールのためだけにス

トックしているような気がします。スベアスの問題などもあって、災害時の極限状態のときに本当にこれを食べられるのかなと思うような備蓄食も多いんですね。もうそろそろただ置いておくだけの備蓄はやめた方がいいんじゃないかと思っています。

関：災害時に食べておいしいものは普段食べてもおいしいんだと思うんですね。だから非常食というよりは、普通の食として備蓄食を考えて欲しいなと思います。いずれば入口からコントロールできるようなビジネスモデルも考えているのですが、そのときには出口が必要とされるものだけを揃えた Stock Base ブランドの備蓄品を作っていきたいと考えています。

江森：企業がとりあえず「ポーズ」で災害備蓄をしているというのは、まったくその通りだと思います。本当に災害が起こったとき何が必要なのかということを本質的に考えるべきですね。私も含め(笑)。

最後に今後の抱負をきかせてください。
関：廃棄はシステムが確立されているので簡単に産廃業者に依頼できますが、寄付はシステムが確立されていません。寄付という行為が廃棄と並ぶ選択肢になるような寄付が文化として定着するような社会を目指していきたいです。

菊原：モノを循環させるとかフードロスをなくすとか合理的な理由はあるんですけど、それよりは、困っている人がいてそれをなんとかしてあげたいと思ったときに、その思いをつなげられるサービスにしていきたいと思っています。そのために会社も持続可能であることが必要なので、もっとしっかり稼いでいきたいと思っています。

温度上昇1.5度へ——パリ協定ルールブックが完成

昨年11月に英国のグラスゴーで開催された「気候変動枠組み条約第26回締約国会議（COP26）」では、2020年代の気候変動対策に関する国際的合意である「パリ協定」のルールが決められるなど、多くの成果がありました。

中でもパリ協定での「2℃より十分低い温度上昇を抑え、1.5℃に抑えるための努力追求」との表現に加え、「努力の追求を決意」と「決意」を付け加えた一歩踏み込んだ表現になったことは特筆すべきことです。1.5度への関心は2018年に「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」が発表した

『1.5℃特別報告書』をきっかけに世界的に高まってきました。特別報告書では次のような報告がなされました。

- ・2100年までの海面上昇は、気温上昇が2度の場合よりも1.5度の場合のほうが約10センチ少なくなり、リスクにさらされる人は最大1千万人減る。
- ・世界の海洋での年間漁獲量の減少は2度なら3000万トンを超え、1.5度の場合の2倍に達する。
- ・2005年までの30年間を基準に、洪水による影響を受ける世界の人口は、2度の場合170%増で、1.5度の1.7倍。

・世界のサンゴ礁は2度だと99%以上が消失。1.5度だと70〜90%。など

このように気温上昇が2度と1.5度では地球環境や人類に与える影響がまったく異なることから、インドなどの反発はあつたものの、1.5度を強調する形で決着しています。科学的根拠に基づき5年以上15年以内の二酸化炭素排出量削減目標を立てることを企業に求めるSBT (Science-based Targets) イニシアチブの参加企業数は11月24日現在で169社。その中にはすでに1.5度目標を掲げている企業もあり、今後企業においても1.5度を念頭においた取り組みが

広がっていくと考えられます。SBTではサプライチェーン全体での排出削減が求められることから、中小企業においても一層の温室効果ガス排出削減が求められることになるでしょう。

『IPCC1.5℃特別報告書』ハンドブック
公益財団法人地球環境戦略研究機関



グリーン・バリューチェーンプラットフォーム
環境省・経済産業省



つれづれ インターンシップ

～インターンシップに見る現代若者考②～

竹見：今年度は2年ぶりにたくさんのインターン生を受け入れたよね。特に大学生が増えた？

真島：ですね。コロナ禍前の2019年度で大学生は4人、今年度は7人。高校生も例年1校1名だったのが2校2名と、新しいご縁が広がってますよね。

竹：大学も高校も実施時期が夏休みに集中するから、受入れのスケジュールを組むのも結構大変だと思うけど、何か工夫していることとかある？

真：うちのインターンは最低5日で受け入れているので、インターン生をわざと数日かぶらせるようにしています。全日程かぶるのはダメで、数日ってところがポイントですね。

竹：ん？どういうこと？まとめて受け入れて、会社の説明とかまとめてやった方が効率よくない？

真：チッチッチ。数日ずらすことで先に来ていた学生が「インターンシップの先輩」になるのです。その先輩に社内ルールなどの説明を担当してもらおうと「案外面倒見の良い子だな」とか「教えるの向いてるな」とか、普段は見られない一面を知ることができて、それもフィードバックしてあげることができるので研修内容の充実につながります。それに何より、伝える、教えることで本人の理解が深まるってところが大きな効果だなと思います。

竹：なるほど～、それでうまく回っているわけだね。うちのインターンって採用の延長線ではないし、社会経験してもらうことだけを目的にしているから、ある程度の期間いてもらわないといけないんだけど、5日間は適正だと思う？

真：足りないぐらい(笑)。どの会社も同じだと思いますが、仕事ってすぐに覚えられるものばかりではないから、2〜3日では職場の環境に慣れた頃に終わってしまい、ほとんど何も経験できないんですよね。それだとただの会社見学と変わりがなくあまり意味ないなあと思います。たった2日ですが、3日間で5日間では大きな違いがあります。

期間ということではインターンの前も大事で、事前訪問に来た学生とそうでない学生では、職場環境に慣れるまでの時間差が顕著です。スタートダッシュに差がついてしまうと、その後のあらゆる面でも差が出てしまうので、今後はできる限り事前訪問してもらおうと思っています。

竹：僕らもインターン生に教えられることって多いよね。来年度はどんな子がくるのか僕も今から楽しみ。

真：ほんとに沢山学ばせてもらうし、うちの5日間で全部の研修をやってもらうわけですが、若手社員も教育を担当しますから、これはとても良い社員教育になっていると感じます。これからひとりでも多くの若者の社会経験を手伝えるように頑張ります。



先輩インターン生（手前）が後輩インターン生を指導

あなたの知らない ふおんとのはなし

第八話 読みやすさとは

高齢化の進展により老眼の方が増えてきたこともあり、近年「文字を大きくして欲しい」というご要望をいただく機会が増えていきます。文字が小さいと読みにくいからというのその理由ですが、文字が大きいことと読みやすいことにはどの程度の相関があるのでしょうか。

視覚のユニバーサルデザインを研究しているNPO法人メディア・ユニバーサル・デザイン協会によれば、A4サイズの印刷物に記載する場合は12ポイント以上が適切とされています。ただし文字サイズを大きくすれば、ページ数を増やさなければいけなくなり、それが心理的な読みにくさにつながる場合もあります。

文字サイズに対する行間も読みやすさの重要な要素となりますが、こちらは文字サイズの3分の1から2分の1が適切とされています。つまり12ポイントの文字の場合、行間は4〜6ポイント、行送りで16〜18ポイントが適切です。文字サイズを大きくしたいがために行間を狭くしている文書を見かけますが、それではかえって読みにくくなってしまい本来転倒です。また、1行の長さが長くなるにつれて、行間は広くした方が読みやすいと言われていますが、あまりに長いと読みにくいので、その場合は2段組にするなどの工夫が必要です。あえて1段組にする場合は、左右の余白を十分にとつて、1行の文字数があまり多くならないように注意した方が良いでしょう。その余白については、A4サイズの場合で上下左右それぞれ25〜30mm程度はあけた方が読みやすいですが、内容をたくさん盛り込もうとして余白を犠牲にしてしまっているケースもよく見受けられます。

このように、読みやすさを決めるのは文字サイズだけではなく、文字サイズに合った行間の設定や、1行の文字数、適切な余白、全体の文章量、全体のページ数、見出しの大きさ、フォントの選定など、様々な要因があります。それらを総合的に見直し、調整することで読みやすい印刷物になっていきます。

環境と情報セキュリティのための 「外部委託先訪問」

昨年12月7日、製本会社、紙加工会社などの委託先協力会社を訪問しました。この訪問は、当社製品に関わる協力会社の環境配慮や情報セキュリティへの取り組みを確認するため年に1回実施する現地視察と、新しい機械や技術の情報収集をする「プチ博覧会」の位置付けを兼ねたワクワクする取り組みです。

今回は3社に訪問、それぞれ独自の取り組みをヒアリングでき、とても勉強になりました。今後も協力会社の皆さんと連携し、よりよい地球環境や社会のための取り組みを継続するとともに、丁寧な集計作業と検証を続けて参ります。



SDGs&CSRセミナー中間報告

2021年5月から定期的に開催している弊社主催の「SDGs&CSR実践導入セミナー」(SDGs&CSR Compass)を活用してイチから学ぶ「SDGs導入」。以前は対面でのリアル開催でしたが、コロナ禍でオンライン開催に切り替え試行錯誤しながら、2021年11月末の時点で339名の皆さまにお申込みをいただきました。

満足度指標のひとつであるNPS(ネット・プロモーター・スコア)も徐々に高スコアになっており、最高57の高評価をいただいております。

1月からは内容を一新し、理解度別に分けるなど、より多様なニーズにお応えできるよう、新たなセミナーシリーズを展開する予定です。皆さまのご受講をお待ちしております。



12月ありがとうの日「認知症を知ろう」 認知症講座と笑顔の教室

昨年12月、地域にお住いの高齢者の方を対象に、認知症講座といつまでも若々しくいるための笑顔の教室を開催しました。この企画は、JO第37号でも紹介した「お年寄りに優しいまちづくり」を目指す認知症啓発のひとつとして、大口仲町第三町会と連携して企画しました。

朝からの降雨と今冬最低気温という悪条件で、一体何人の方にお越しただけか不安でいっぱいでしたが、心配をよそに29名がご参加くださいました。

済生会神奈川病院認知症認定看護師の市川貴子さんから認知症サポーター養成講座と同等の内容の講演のあと、抗加齢指導士・顔ヨガインストラクターの斉藤友子さんから笑顔がもたらす効果と、実際に顔の筋肉を動かす「顔ヨガ」を教えていただき、参加者の皆さんもキラキラ輝く素敵な笑顔になりました。

私たちの呼びかけに自分事として興味関心を持って参加して下さったことに感謝し、大口の皆さんがいつまでも元気に過ごされることを願っています。

